市川のまち 地名の由来 《No.2》

地形に起源？ 今もナゾ

曽谷

最近、地名に関した本がたくさん書店に並ぶようになりました。しかし、どの本を見ても、「ソヤ」についての地名を解説したものは見当たりません。ソヤが市川市だけにしかないからかと思ったのですが、そうでもありません。神奈川県には「曽屋」があり、千葉県内にも印旛郡印西町に「曽谷ノ窪」があります。全国ではまだまだあるものと思われます。

市川市の曽谷は、ふるくは「蘇谷」とも書きました。文字は当て字ですから、地名では音が大事なことになります。そこで、地形図を見て、三者の立地条件を比べてみました。

市川市の曽谷は、ご存じのように、北から南に向けて大きく舌状に延びた台地の北部を指し、そこには西から東に入り込んだ谷津が稲越町や松戸市との境界をつくっています。

この入り込んだ谷津の南側台地上に東西二一〇㍍、南北二四〇㍍の範囲で広がっている大貝塚が、「曽谷貝塚」です。

印西町の「曽谷ノ窪」は、台地の規模は小さいのですが、市川市の曽谷と同じく、台地に入り込んだ谷津の奥まった所を指しています。そして、その斜面に、今から一三五〇年ほど前（美術史上での白鳳時代）に寺院の瓦を焼いた窯がつくられた、古い歴史をもった地域です。

次に、神奈川県の「曽屋」ですが、現在の秦野市の中央部を占め、葛葉川と水無川とにはさまれた、かなり広い範囲を称していたといいます。地形は南から北に盛り上がった形状をしていますが、特に目立つほどの谷津は形成されていません。

ソヤのヤが、市川と印西では谷を指したもののように思われますが、どうも秦野のヤは、そうではなく、盛り上がった地域を指しているように思われます（市川市の高谷のやと同類か？）。ソヤの地名については、今後、研究を進めなければならないものです。

市川市の曽谷の地域に大きな勢力をもったのが、鎌倉時代の末、日蓮上人に帰依して僧となった曽谷教信でした。曽谷氏の出自については、いろいろな説があって明確ではありませんが、国分の領主国分胤鎮が、同族の重胤に曽谷村の近在三〇〇〇町を与えたところから、その子道頂の時に、地名にちなんで曽谷氏を名乗ったといいます。この道頂の長男が教信だというのです。

教信は出家して日蓮から日礼の法号を授けられ、城外に安国寺を建立しました。また、晩年には大野に法蓮寺を建立し、ここで亡くなりました。

この曽谷の安国寺境内に、中国の書聖と仰がれた王羲之の宮が建てられたのは、今から二四四年前の延享元年四月のことで、これは、当時江戸で書家として知られた松下鳥石が、大学者服部南郭とともに曽谷に来て建てたものでした。

曽谷の地名の起源については明確ではありませんが、江戸時代には、既に、曽谷が一流の学者にも知られていたことを証明する事実です。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）

◇

次回は「柏井」を予定しています。